

うけつぐ伝灯 伝えるよろこび 『念仏者の生き方』(上)

相愛大学教授
釈 徹宗

大阪府池田市・如来寺住職。NPO法人「リライフ」代表。近著『落語に花咲く仏教一宗教と芸能は共振する』で第5回河合隼雄学芸賞受賞。『随縁つらつら対談』(本願寺出版社)ほか著書多数。



心のこもったパスを

おはようございます。このたびは「全国門徒推進員のつどい」にご参集いただき、誠に尊いことでございます。

さて、本日午後からは第25代専如ご門主の伝灯奉告法要がございませう。これは「法灯を伝える」、つまり、私たちはきちっとパスをキャッチしましたよ、そして次世代へとパスを出していきますよ、ということをおあらためてみんなで確認し合う法要でもあります。なぜ、私たちは法を聞き、伝えていくのでしょうか？ それは、苦難の人生

を見事に生き抜いていくためであり、また、この私がお浄土で仏となり、この世に還ってきて、ご縁のある方々を救っていくという壮大な道筋を歩いていくためです。

教えをきちっとキャッチする心と体、あるいは次世代へ何かを伝えていく心と体というものは、人間にとって、人類にとつてすごく大事なものです。私の友人に元全日本選手として活躍したラグビー選手がいるのですが、ラグビーには「ホスピタルパス」というのがあつたそうす。ホスピタルとは英語で病院の意味で、ケガをしやすいパ

スのことをそう呼ぶそうす。どんな

パスがケガを招くかという、雑に出されたパスです。あまり思いが込もつてないようなパスというのは、やっぱり危ないそうす。ラグビーボールは楕円形をしていて扱いにくい。だからキャッチしやすいようにパスをしないといけない。心の込もつたパスかどうかは、キャッチした時にわかるんだそうす。「とつてくださいよ」という思いが込もつたパスをキャッチする。そして、自分も思いの込もつたパスを出す。パスにパスを継いでいくわけです。扱いにくい難しい形のボールをパ

スにパスで継いでいく。そこにラグビーの最大の喜びがあるそうす。

ラグビーに限らず、人間には先人とつながり、次世代へとつながつていく喜びがあると思つた。たとえば先人と同じ道を歩む時、もしあの人がここにいたらどんなことするだろう？ きっと合掌してお念仏するだろうな、という行為を自分も行い、それを次世代へと伝えていく。それはきっと人間の根源的な喜びだろうと思つた。

部分は、敷物の上に人が両手両足を広げて、全身で恵みや慈しみを受けている姿からできたそうす。その先人が私のためにしてくださつたパスを、ちゃんとキャッチしている姿のことを、インドの仏教の言葉で「クリタジュニヤ」といいます。これを日本語では「知恩」と翻訳されます。

日本の仏教では「知恩報徳」とか「知恩報謝」といいます。報徳とは、先人のパスに徳で報いていく意味となりませう。この場合の「徳」というのは、「周囲に与える良い影響」というような意味です。先人のパスをきちっとキャッチする心と体を養い、次世代へと心の込もつた、できるだけとりやすいようなパスを出す。それが、知恩報徳、知恩報謝という言葉です。感謝のパスを出していく、喜びのパスを出していく、そういう意味ですね。

を聞くと、私たち真宗門徒はやはり「恩徳讃」を連想しますよ。

如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も
ほねをくだきても謝すべし

(註釈版聖典610頁)

親鸞聖人のご和讃にメロディをつけて、真宗各派で歌つていませう。親鸞聖人は、こういうご和讃を450以上作

全国門徒推進員のつどい
記念講演

言葉で「クリタ」といいます。クリタは日本語で「恩」と翻訳されます。

恩という字の上の

そんな恩とか報、謝や徳という言葉





っておられます。中でもやはり恩徳讃はたいへん印象深いです。「身を粉にしても」「ほねをくだぎても」という強い表現です。

「如来大悲の恩徳は」ですので、恩も徳も仏さまからの恵みであり、慈しみであると味わうのが、私たち真宗の特徴ですよね。恩も徳も、如来さまが私のために準備してくださったものだから、誠心誠意、報いていこう。それが「身を粉にしても」というような表現になるのでしょう。

普通、仏教用語で「師主」はお釈迦さまのことで、「知識」は自分を導いてくれた先人たちのことになるのですが、おそらく親鸞聖人の思いは、直接的には法然聖人のことだと思います。けれども、その思いはお釈迦さまから始まって、各知識の皆さん、お正信偈に出てくる七人の高僧にもつながります。インド、中国、日本と、次々とパスを

つないでくださった。聖徳太子もつないでくださった。そして親鸞聖人へ。二千何百年とパスが続きました。しかし、何千年続いたパスでも止まる時は一瞬です。誰もパスをしなかったらそこで止まっちゃうんです。幸い誰もパスを止めずに、すごい、とんでもないパスが続いて、なんと時を超え、空間を超えて、自分のところまで届いた。感謝せずにはおけない、というこの思いが「ほねをくだぎても」という表現になるんだろうと思います。

パスをつなぐ大切な三つの心

さて、このパスにパスを継いでいく心と体を養う手がかかりについて、少しお話させていただきます。お正信偈のご文の一部です。

三不三信誨慇懃
像末法滅同悲引

す。そういうことは、日常生活を送りながら常に法を求める心があるからこそ起こるんです。常にわからない、わからないと求めながら、ある時、パスのピースが最後にパチッとはまって、パッと見える世界がある。そういうことだと思えます。

聞かせていただくこととする心が、あつかったりうすかったりします。でも聞き続けていくうちに見えてくる世界がある。『阿弥陀経』には、吹く風の音も鳥のさえずりも仏法を説く、という世界が語られています。求める心があつたら鳥のさえずりが仏法を説く、ということとは、起こり得ると思います。その心がうすいのが、不淳心ということとです。

「私はこの道を歩んでいます」

さて、二つめ「不二心」。親鸞聖人は、二つには「信心」ならず 決定なきゆ

「三不三信の誨」
慇懃にして、像末・法滅同じく悲引す」
(同206ページ)
像法の時代、末法の時代、法滅の時代、いかなる時代であっても、三不三信の教えが丁寧丁寧に、同じように恵みと慈しみで導いてくださるといふ壮大な場面です。

この三不三信というのは、「三不信」と「三信」という二つが一つに縮められています。「三信」は私たちがお手本とするような心のことで、「淳心」「一心」「相續心」という三つの心のことをいい、「三不信」はその逆の「不淳心」「不二心」「不相續心」ということで。順番に、ひとつひとつお味わいていきましょう。

まず、「不淳心」。親鸞聖人は、一つには「信心あつからず 若存若亡するゑなれば」(同ページ)と書いておられます。定まっていけないから「不二心」、つまり「迷つ心」のことです。

7、8年前、遺影を長押に掛けてはダメだという噂が日本中に広まったことがあったんです。当時、ズバリ言つこと有名な占い師がテレビでそう言つたらいいのです。あるご門徒から「住職やったら、ちゃんと門徒に指導する責任があるのと違うか。写真を飾つたらあかんらしいな。わし知らんと何十年も掛けてたがな…」と言われました。そこで私は「おじさん、イスラム教徒ってブタを食べないんですよ。テレビでイスラム教の人が出てきて『ブタは絶対食べてはいけません』て言ったら、おじさん今晚からブタを食べるのやめる?」と聞くと、「いや、やめへんよ」とおっしゃった。「イスラム教の人が言うことは全然気にしないで、なんで占い師が言ったら気にするの?」

全国門徒推進員のつどい 記念講演

農作業で草を刈りながら、刈った草を牛の背中に一つ、二つ、三つめを乗せた時にわかったというんで

ゆゑに「(同586ページ)と書いておられます。若存若亡は、あつたりなかつたりするということ。不淳心は、あつくない心。つまり、うすい心。聞かせていただくとうとう「法を求める心」があつかったりうすかったり、その心があつたりなかつたりするということとです。常に仏法を求める、聞かせていただくという態度で暮らす。そこに私たちの日常生活、われわれの歩む道があります。

「因幡の源左さん」という有名な念仏者がおられました。今の鳥取県の方で、若い時から仏法を一生懸命聞いたけれども、どうしてもわからない。わからない、わからないと思つていたところ、

農作業で草を刈りながら、刈った草を牛の背中に一つ、二つ、三つめを乗せた時にわかったというんで

という話をした覚えがあります。

これは、宗教という領域の特性です。宗教というのは、こういうことが起るんです。「私にとつての真実」という面が宗教にはありますので、この道を歩んでいる人にとってはものすごく大事なことでも、別の道を歩んでいる人には何の関係もないということが起るんです。これは結構大事なことです。つまり、私はこの道を歩みますので、それは関係ありません、という態度を養っていかないと、宗教の情報から次へとやってくるものですから、それを追いかけていたら、ぐるぐるぐるぐる迷わなきゃいけないということになります。

宗教で生き方が定まっていくはずが、宗教に迷ってしまつては元も子ありませんし、何一つ解決しないんです。「不一心」は「迷う心」。定まらないっていうことはそういうことですよ。

というのはきちっと押さえてるなあと、感心したことがあります。
真宗門徒は日常生活が仏道

さて、三番目は「不相続心」です。「相続」というのは仏教の言葉です。一日一日、あるいは一瞬一瞬、鎖の輪のようにつながっていくことを「相続」といいます。不相続心は、「信」がつながらない心ということになります。親鸞聖人は、三つには「信心相続せず余念間故とのべたまふ」(同ペ)と書いておられます。途切れ途切れ、という意味になります。

お聴聞させていただく心、お念仏の心を、一日一日つなげていく、ということなんですが、この相続する心というのは、生活の様式に現れると思うんです。念仏者は念仏者の生

全国門徒推進員のつどい
記念講演

その一方で、真面目にこの道を歩めば歩むほど迷う、迷わない道を歩めば歩むほど迷う自分が出てくる、ということが、浄土真宗ではよく起こっています。

これもご門徒のお話です。ずーっとお聴聞を続けてこられた念仏者のおばあちゃんがおられます。気の毒なことに、50代前半の頃に一番下の息子さんを、病気で亡くされました。毎月お参りにいくと、いつも後ろに座って一緒におつとめをされるんです。ある日、後ろで「しかし、あかなあ」っておつとめが終わった後で話を聞くと、「私らなんぼお説教を聞いてもあきません。そんな人間ですわ…」というのです。おばあちゃんは「お説教で、仏さまにお願いごしたらあかん」っておつとめを聞いて。そうでしょ、ずつとそつと何十年も聞いてきました。で

活の様式みたいなものをずーつとつなげてきたわけですよ。先ほど言いました、先人のパスをキャッチして次世代へとパスを出すというのは、このころがひとつポイントだと思います。私たち真宗門徒は、真宗門徒独特の様式をすごく大事にしてきました。これはなぜかという、日常生活の中に仏道があるからです。「真宗宗歌」で歌いますよね。

「六字のみ名をとなえつつ 世の生業にいそしまん」

世の生業にいそしむところに仏道があるのです。どこか特別なところにもって、厳しい修行をしたり学問をしたりするんじゃないかって、世の生業の中に私たちの仏道はあります。世の生業というのは、生活のすべてです。お仕事することも家庭生活を営むことも、子育てすることも、ご近所づきあいのものも、「コミニ」をするのも全部世の

も、いざ、自分の息子がもう末期だとなったら、朝に晩に、なんとかしたげてくださいってお願いごとをしてしまいまし

た」と言われるんです。それで「だから、いくら聞いてもだめなんです」とおっしゃっていたんですね。

私、その時ちよつと感動したんですよ。少なくともダメだとは一切思わなかったです。やっぱりね、ずーっと聞き続けてこられたからこそ、「あんなに聞いたのにダメなんだ」という自分がありありと見えたわけですよ。もし聞かれていなかったら、お願いごとするのがダメだとも思わなかったかもしれないですね。でも、「あんなに聞いたのに…」というように、迷わない道を歩めば歩むほど迷う自分が出てくるっていうところを、浄土真宗の教え

生業でしょ。それをいそしむのですから、誠心誠意、誠実に世の生業に向き合っていく。でも、世の生業にいそしむだけだったら、仏教にもならないし、浄土真宗にもならないんです。

「六字のみ名をとなえつつ」

口に六字のみ名を称えながら世の生業にいそしむ、誠心誠意、誠実にやっっていくところに、私たち浄土真宗の歩む道がありますし、それがこうして数百年にわたって続けられてきたものですから、日常生活の中に独特の様式をずいぶん生み出してきました。これは浄土真宗の誇るべき伝統だと思います。

(以下次号)

(平成29年5月2日)全国門徒推進員のつどい 記念講演「より」

